

2012年2月11日 尹東柱を偲ぶ会（同志社大学）

1 判決文

尹東柱は1917年に中国東北部間島省明東（現在は中国吉林省延辺朝鮮自治州に属する）に生れ、1945年に福岡で獄死した朝鮮のキリスト者詩人である。日本では伊吹郷氏の全訳詩集¹や茨木のり子氏の文によって知られるようになった。

『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ 1923～1945』（富坂キリスト教センター編、新教出版社、1995）には尹東柱に対する判決文が収められている。1944年3月31日、京都地方裁判所第二刑事部による判決である。²

判決

本籍 朝鮮咸鏡北道清津府浦項町七十六番地

住居 京都市左京区田中高原町二十七番地武田アパート内

私立同志社大学文学部選科学生

平沼東柱

大正七年十二月三十日生

右ノ者ニ対スル治安維持法違反被告事件ニ付当裁判所ハ検事江島孝関与ノ上審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人ヲ懲役二年ニ処ス

未決勾留日数中百二十日ヲ右本刑ニ算入ス³

このように尹東柱は治安維持法違反とされて懲役2年の判決を受けたのであった。判決理由は長文だが、その初めのほうを掲げる。

被告人ハ満州国間島省ニ於テ半島出身中農ノ家庭ニ生レ同地ノ中学校ヲ經テ京城所在私立延禧専門学校文科ヲ卒業シ昭和十七年三月内地ニ渡来シタル上一時東京立教大学文学部選科ニ在学シタルモ同年十月以降京都同志社大学文学部選科ニ転シ現在ニ及フモノナルトコロ幼少ノ頃ヨリ民族的学校教育ヲ受ケ思想的文学書等ヲ耽読シタルト交友ノ感化等ニヨリ夙ニ熾烈ナル民族意識ヲ抱懷シタルカ長スルニ及ヒ内鮮間ノ所謂差別問題ニ対シ深ク怨嗟ノ念ヲ抱ケル傍ラ我朝鮮統治ノ方針ヲ目シテ朝鮮固有ノ民族文化ヲ絶滅シ朝鮮民族ノ滅亡ヲ図ルモノナリト做シタル結果茲ニ朝鮮民族ヲ解放シ其ノ繁栄ヲ招来セム為ニハ朝鮮ヲシテ帝国統治權ノ支配ヨリ離脱セシメ独立国家ヲ建設スルノ他ナク之カ為ニハ朝鮮民族ノ現特ニ於ケル実力或ハ過去ニ於ケル独立運動失敗ノ跡ヲ反省シ当面朝鮮

人ノ実力民族性ヲ向上シテ独立運動ノ素地ヲ培養スヘク一般大衆ノ文化昂揚並ニ民族意識ノ誘発ニ努メサルヘカラスト決意スルニ至リ殊ニ大東亜戦争ノ勃発ニ直面スルヤ科学力ニ劣勢ナル日本ノ敗戦ヲ夢想シ其ノ機ニ乗シ朝鮮独立ノ野望ヲ実現シ得ヘシト妄信シテ益々其ノ決意ヲ固メ之カ目的達成ノ為同志社大学ニ転校後予テ同様ノ意図ヲ蔵シ居タル京都帝国大学文学部学生宋村夢奎等と屢会合シテ相互ニ独立意識ノ昂揚ヲ図リタル外鮮人学生松原輝忠白野聖彦等ニ対シ其ノ民族意識ノ誘発ニ専念シ来リタルカ（以下略）

上記判決理由によれば尹東柱は、「大東亜戦争ノ勃発ニ直面スルヤ」「日本ノ敗戦ヲ夢想シ」、その機に乗じて「朝鮮独立ノ野望ヲ実現シ得ベシト妄信シ」、その目的達成のために同志社大学に転校後、「民族意識ノ昂揚ニ努」めるなど、「国体ヲ変革スルコトヲ目的トシテ其ノ目的遂行ノ為ニスル行為」をなしたとされている。

尹東柱は 1941 年 12 月、ソウル（当時、京城）の延禧専門学校（現、延世大学校）を卒業し、翌 1942 年 4 月、立教大学に入学した。当時、立教大学には陸軍大佐・飯島信^{のぶゆき}之が配属され、軍事教練を学生に強制していた。飯島大佐は「おれは耶蘇はきらいだ」「立教はミッション系だから、アメリカ人のための第五列（スパイ）が活躍する可能性が高い大学だ。それゆえ大学内を徹底的に変革せねばならない」と主張し、また文学部を「文弱部」と呼んで嫌っていたという。ところがある証言によれば、その軍事教練を尹東柱は拒否していたという⁴。そのために彼は非常な圧迫を受けたに違いない。

配属将校を通して大学に対する軍部の圧力は次第に強まり、同じ年 9 月、立教学院は定款の第 1 条から「基督教主義ニ基ヅク」を抹消、「皇道ノ道ニヨル教育ヲ行フ」ことを目的としてうたうことになった。10 月には礼拝堂が閉鎖された。

こうした中、尹東柱は夏休みの帰省の後、10 月には同志社大学英文科に移った。翌年 1943 年 7 月 14 日、京都の下鴨警察署（特高）は彼を逮捕した。上記のとおり、治安維持法違反、独立思想を鼓吹したというのが理由であった。しかし彼は組織的独立運動をしたわけではない。韓国の歴史、言葉、文化が奪われ、失われていく状況に対して、民族の独立を願って友人と語り合っただけである。しかしハンブルで詩を書くこと自体が問題であった。彼が立教時代に書いた詩 5 編のみは伝えられているが、しかし京都で書いたはずの詩は書物やノート類と一緒に押収され、行方は分からない。

彼は福岡刑務所に収監され、強制労働をさせられ、虐待、拷問を受け、翌年 1945 年 2 月 16 日午前 3 時 36 分、福岡刑務所北三舎 2 階独房 108 号室で絶命した。満 27 歳であった。

2 弟、尹一柱の回想

尹東柱が獄死した知らせが 2 日後、故郷に届いた。弟、尹一柱は次のように回想している。

「毎月遅くとも五日までには必ず来ていたはがきが 1945 年 2 月には中旬になっても来なかった。死亡通知の電報が来た日は日曜日だった。家族たちはみな教会に出かけて、わたしと弟が留守番をしていた静かな午前、舞い込んできた電報は『2 月 16 日に東柱死亡、死体ひき取りに来られたし』だ

った。わたしはあわてて教会に駆けていき家人に知らせ家までお連れした。ほどなくして礼拝を終えた人たちが集まってきて、家の中はたちまち棺のない喪中の家になった。しばらく村に行っておられた母を、人を出してお連れし、全家族が悲しみに浸った。」⁵

遺骨は父、尹永錫の手に抱かれて戻り、国境の川、豆満江を渡った。尹一柱はその時のことを次のように記している。

「遺骨はそこで父の胸から私が受け取り、長い長い豆満江の橋を歩いて渡った。2月末のとても寒く、曇った日、豆満江の橋はどうしてそんなに長く見えたのか——。皆、それぞれの心の怒りを抑えて黙々と渡った。ひとことの言葉もなかった。」⁶

それから20年後、尹一柱は、大韓イエス教長老会の機関誌『基督公報』（1965.2.20）に次のような文を寄せた。これは『日韓キリスト教関係史資料Ⅲ』に掲載予定のものである。

兄、尹東柱——彼の二〇周忌に 尹一柱 （基督公報）

2月16日は故尹東柱氏がキリスト教文人として凄惨にも監獄で（日本）亡くなってから20周忌である。彼の弟、尹一柱氏が彼の兄の20周忌を迎えてその日の生き生きとしたことどもを私たちに示してくれる。尹一柱氏は工科を専攻したけれどもやはり詩人として活躍している。釜山大学校工科大学で。【編集者注】

東柱兄さんが日本の監獄でむごい刑罰に打ち勝てずに逝かれてから、いつしか20年を数えることになりました。今また20周忌にあたって追慕する文を書こうとするのですが、無念と悔しさの思いが先立つのを禁じ得ません。兄さんについてはいろいろな機会に追憶の文を書きましたが、20年前の故人の生活を探って記録するのは、日がたつほどにためられるものがあります。彼の孤独であった人となり【人品】と生活のすべては作品をとおしてその香気を放っており、それ以外のこのような文は蛇足に過ぎないと信じるからです。

そうです。かれの人となりには香気というほかに表現できない何かがありました。性格がとても寡黙であるのにだれもが彼の横にいたいと感じたのは、優しくて【仁慈】温和な彼の姿のためだと思います。彼の生涯で怒る時を見たことがありません。彼が残した詩から私が特別だと信じるのは、彼の作品に、彼の人間と信仰と民族と生活のさまざまな意識が、加えることも削ることなく現れていると感じられるからです。彼の全学業が私学（当時の帝大入学資格を放棄したことがある）、ことにキリスト教系学校で一貫していることは、彼の生涯と作品を知る上で何らかの暗示となるだろうと考えます。

私の家族は東柱兄さんが生まれる前から厳格なキリスト教家庭であり、当時の間島は亡命志士が集まった民族主義の故郷であったほど、幼い頃から信仰と民族意識が彼に根を下ろしていただろうと思います。彼は外伯父である金躍淵牧師から少なくない影響を受けたと思います。伯父は間島開拓者の一人であり、漢学者であり、牧師であり、多くの学校の設立者でありました。

休暇になると韓服を着て、「詩伝」《詩經の注解書》などの漢書を持って伯父さん宅で学問を学び歓談するのが、唯一の楽しみのようなものでした。このような兄もいったん洋服を着れば、そのマナーが西欧的な紳士のそれを連想させたのは、すらりとした彼の背のためだけではないと思います。要するに彼は「モッ」《粹》を知る青年でありました。

中学時代には日曜学校の教師の仕事も熱心にし、専門学校初級学年のときは休暇で帰郷すると夏期聖書学校のことも興味を持って行いました。専門学校後半には信仰に多少の懐疑を感じたような時もありました。

卒業する頃にはキルケゴールを愛読し、彼の友人であったM牧師との対話で神学にも深い造詣を示し、また信仰から離れていなかったことを示したといます。今も忘れられないのは、ある冬休みのクリスマスの日、寒い夜明けに私の手を引いて教会に出席し、敬虔な雰囲気浸って帰る彼の姿です。ある時期、社会主義の本を耽読した時もありますが、彼が故郷に帰ってくればまた信仰の雰囲気に浸っていたようで、彼の心の故郷はやはりクリスチャニティだったとあえて言うことができます。

彼が 1944 年に日本の福岡刑務所に収監されていくらもならないころ、英韓対照新約聖書を送ってほしいと言うので送ってあげたことがあります。

1945 年 2 月 16 日、彼の獄中で 29 歳〔訳者注、数え年〕という短い生涯を終える時まで、この「主の御言葉」を唯一の友として永遠の世界に近づいて行っただろうと信じるのです。

作品をほとんど発表する道もなく、また発表しようとする焦りもなく、こつこつと詩を作ってきた彼の正しく清い生涯に、この短い文が瑕とならないかと懸念しながら、彼の絶唱のいくつかを朗読してみます。

○ ○

苦しんだ男、
幸福なイエス・キリストにとって
そうだったように
十字架が許されるのなら
首を垂れ
花のように咲きだす血を
暗くなってゆく天の下に
静かに流しましょう。【十字架の一節】⁷

1965 年 2 月 6 日

【筆者＝釜山大学校工科大学教授】

3 尹東柱と尹一柱——詩に現れた兄弟の思い

尹東柱に「弟の印象画」という詩がある。「1938 年 9 月 15 日」の日付がある。この年の春、尹東柱は延禧専門学校に入学した。おそらく夏休みを故郷で家族とともに過ごし、また延禧に戻った頃であろうか。

弟の印象画

赤い額に 冷たい月が差し

弟の顔は 悲しい絵だ。

歩みを止め

そっと幼い手を握って

「お前は大きくなったら何になる」

「人になる」

弟の悲しい ほんとうに悲しい答だ。

そおっと 握っていた手を放し

弟の顔を もう一度見つめる。

冷たい月が 赤い額に濡れ、

弟の顔は 悲しい絵だ。

当時、兄の東柱は 20 歳、弟の一柱は 10 歳であった。「人になる」とはどういう意味だろうか。「まともな人」か、「立派な人」か。あるいは「まことの人」か。すでに大きくなった兄は、「人になる」ことの困難を感じていたであろう。日本の統治、抑圧の下にあっては、それがいっそう困難であっただろう。先に引用した尹一柱の「兄、尹東柱——彼の二〇周忌に」には、あるクリスマスの早朝、兄に手を引かれて教会に行ったこと回想されている。それはあるいは「弟の印象画」の 3 ヶ月余り後のことだったかもしれない。

この詩が作られたちょうどそのとき、彼がかつて中学生を送った平壤では、朝鮮イエス教長老会⁸総会が開かれていた。その総会は 9 月 10 日、日本当局の強制により神社参拝を実施する決議を行った。朝鮮総督府のある役人は「今やキリスト教の最後の牙城は潰えた」と述べた⁹。

尹東柱が獄死した半年後の 1945 年 8 月、日本は敗北し朝鮮は解放を迎えた。それから 7 年後、あの「弟の印象画」から 14 年後の 1952 年、尹一柱は「たんぽぽの笛」という詩を書いた。

たんぽぽの笛

日の光が温かい兄さんの墓の横に

たんぽぽが 1 株立っています。

1 本には 黄色い花

1 本には 白い種。

花は摘んで胸に挿し

種は息で吹いてみます。

かるくかるく
空に消える種、

——兄さんも 黙って行きましたね。

目を閉じて吹いてみるたんぼぼの笛
兄さんの顔 はっきりと浮かびます。

飛び立った種は
春になれば広い野原に
また咲くでしょう。
兄さん、その時は
わたしたちも会えるでしょう。¹⁰

「兄さん」と訳した原語は「オンニ」である。これは普通、妹が姉を呼ぶ言葉である。しかし幼い弟が兄を情をこめて呼ぶ場合にも用いられる。この詩を書いたとき、彼は14年前の月明かりの下での兄の顔と手の感触を、兄の問いと自分の答を、思い出していただろうか。

尹一柱は成均館大学校教授として建築学を研究、教授する傍ら、『尹東柱全詩集——天と風と星と詩』を編集、正音社から発行した。初版は1948年。増補版は1955年2月16日、すなわち兄、尹東柱没後10年の日付で発行された。兄の生涯を記した文章を一柱は次のように締めくくっている。

「10年が流れ去った今、彼の遺稿を上梓しながら、舎弟¹¹として恥ずかしさ禁じ得ません。詩集の前後に付せられるものをひどく嫌った彼であったことを思うとき、拙文を躊躇したが、生前に無名であった故人の私生活を伝える責任をひとり感じて、あえて筆を執りました。これによって偽りのない故人の一面でも伝えることができれば幸いです。1955年2月 舎弟一柱 謹識」¹²

尹一柱は、兄を天に送ってから40年を経た1985年に、満58歳で天に召された。「兄さん、その時はわたしたちも会えるでしょう」と歌ったとおり、兄弟が天での再会を果たしていることを信じたい。

『日韓キリスト教関係史資料Ⅲ』の編集に取り組みながら思いがけず出会った資料をとおして、時代の嵐にさらされつつも真実を求め続けた兄弟の魂の交流に触れた思いである。

(京都聖三一教会牧師・富坂キリスト教センター「日韓キリスト教関係史研究会」主事)

1 『空と風と星と詩——尹東柱全詩集』影書房、1984。第2版、2002。

2 富坂キリスト教センター編『日韓キリスト教関係史資料』に収録（または収録が予定）されているもの、および詩についてはゴシック体で記した。

3 富坂キリスト教センター編『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ』新教出版社、1995、355頁。

4 宋友恵『空と風と星の詩人——尹東柱評伝』藤原書店、2009、382頁。

5 同書、486頁。

6 同書、487 - 488 頁（訳は原文に基づいて若干手を加えてある）。

7 「十字架」の前半は次のとおり。

追いかけてきた日の光が

いま 教会堂の尖端

十字架にかかりました。

尖塔があれほど高いのに

どうして登ってゆけるでしょうか。

鐘の音も聞こえてこず

口笛でも吹きつつ さまよい歩いて、

（ここから本文の引用に続く。詩本来の空白行は詰めた。本稿に収めた詩は井田訳。）

8 当時の朝鮮最大のキリスト教教派（大韓イエス教長老会はその後身のひとつ）。神社参拝が総会で決議された後も抵抗運動は大きく、1945年の解放までに約50名の殉教者を出した。

9 森浩「事変下に於けるキリスト教」『朝鮮』昭和13（1938）11月（『日韓キリスト教関係史資料Ⅱ』572頁）。『朝鮮』は朝鮮総督府機関誌。

10 『童画——尹一柱詩集』ソル出版社、2004：ソウル、85頁。

11 「舎弟」は自分の弟を指す謙讓語であるが、日本語の場合とは異なり、手紙などで兄に対して弟が自称する言葉としても用いられる。

12 『尹東柱全詩集——天と風と星と詩』正音社、1994：ソウル、237 - 238頁。